

高島美紀さん
オーボエ奏者

心のゆとりを音に紡ぐ

心に音楽を
京都に京響を！

今や定期演奏会は毎回チケットが完売になる人気オーケストラに所属しながら、手弁当で小さなコンサート活動も続ける音の伝道師。パワフルな生き方に宿るものを伺いました。

ストイックな生活からの転機

——オーボエとの出会いを教えてください。

高島 3、4歳からピアノを習っていて、小学生の頃は隣のお姉さんがクラリネットを吹く姿に憧れていました。5年生で鼓笛隊に入り、中学では吹奏楽部に入部。本当はテニス部に入りたかったのですが、部活のオリエンテーションの初日は大雨のぞいてみた吹奏楽部でリードをくわえてみたら、鳴らすことさえ難しいと言われるリード部分が、たまたまピーっと勢いよく鳴った。その瞬間に「はい入部！」と言われました(笑)。プロ奏者でも、そういう偶然の出会いから楽器を決めた人は多いですよ。

——高校は、公立高校では大変珍しい音楽科に進学されました。

高島 私は中学時代ずっと理学療法士になりたくて、音楽高校の受験は先生方から勧められた部分が大きかったです。ところが入学後2週間で、あまりのレベルの高さについていけないと思いました。強いストレスで、じんましんが出たほどです。もともと言われたことは絶対にやり遂げたい性格だったので、取り残されるのが恐ろしくて必死に努力しました。それが後になって実を結んだのだと思います。

高島 直感で動くタイプだし、最後までやり切りたい性格なので(笑)。

——留学はどんな収穫がありましたか。

高島 ドイツの景色を見て暮らし、ドイツ語を聴きドイツの食事を取る。フランスで印象派の美術に触れる。すると自分の中から、今までとは違う感情や音が湧くようになりました。日本人は器用だし、たいいてい良い楽器を持っていますが、ヨーロッパの学生たちはポロポロの楽器でも素晴らしい音楽を奏でます。学んだのは、彼らは私たちが遅くまで練習しないということ。そこでストイックに生きてきた過去を振り返り、音楽から離れる日を意識的に作るうと思えたんです。もっと生活の中に自然に音楽があるような、そんな生き方をしよう。

心の余裕が音楽に表れる

——オーボエの魅力を教えてください。

高島 良い音づくりは良いリード作りから始まります。リードの付いている管楽器の中でも、ダブルリードのオーボエは世界で最も難しい管楽器と言われます。リード作りと調整に費やす時間は練習時間よりも長いし、出したい音を予想しながら常に3次元の意識を持って削るセンスも必要です。リードを作るのは大変ですが、うまく作れた時はオーボエにしか

ます。

——プロへと導く転機は何だったのですか。

高島 大学3年生の夏、草津温泉で開かれた草津国際音楽アカデミー&フェスティバルに参加しました。若い音楽家を対象として約2週間、講習会と演奏会を行う大きな音楽祭です。卒業後の進路に迷っていた時期だったので、せっかくだから本場の先生に習ってみようと思えました。トーマス・インデアミューレというスイス人のオーボエ奏者の先生の講習を受けたところ、これがとても面白かったですね。私の欠点を、まるでお医者さんのように的確に治してくださいました。体の使い方を教えていただいたら、2週間で劇的に音が変わりました。そこで、プロになりたいから留学するのではなく、純粹にこの先生に習ってみたい、外国で勉強してみたいと直感したんです。親には大反対されましたが、4年生の1月に卒業試験が終わるとさつきとドイツへ行き、インデアミューレ先生のおられる大学を2月に受験。合格後は自分で下宿探しをして、日本で卒業式を済ませた数日後にドイツへ引越しました。留学2年目が終わる頃からは、ドイツからフランスの音楽大学にも通いました。

——凄いや行動力ですね！

——出せない素晴らしい音色が出る。世話が焼けるぶん奥深いところが面白いです。

——25歳で京都市交響楽団のオーディションに合格されました。以降はどのような歩みをたどっておられますか。

高島 既にでき上がっている楽団に私のような若手が入っていったので、戦力になるまでは毎日消化するのと体調管理とで必死でした。ところがようやく慣れてきた3年目に、腕の血流が止まる病気になり、4カ月の休養を余儀なくされました。そこで変化が起きました。必死で自分のパートだけを練習して京響に来て合わせていたのが、練習場に来てからみんなに合わせて音を作っていくように意識するようになった。まるで戦うように練習してきたのが、音楽に対して穏やかな気持ちで向き合えるようになりました。落ち着けたおかげで、留学で学んだことも再び思い出せたように思います。

——オーケストラ活動以外に、アンサンブルで出張コンサートなどをよく行っておられますね。

高島 京響は市民の方々あつてのオーケストラです。京響をどなたでも知っている存在にするのが私の現在の音楽活動の目標の一つですし、もっとオーボエという楽器も知っていただきたい。出張コンサートの原点は、障がいのある妹がもし

れませんね。私が理学療法士になりたかったのも妹のためです。妹は昔から、音楽には強い興味と優れた才能を持っているんですね。そこで私も音楽療法に関心があったし、学生時代から妹のいる養護学校や施設などでコンサートを続けてきました。

——同志社女子大学の音楽学科で学ばれたご経験は今にどう生きていますか。

高島 私が同志社女子大学に入ったのは、音楽以外にも幅広い経験をしたかったからです。施設も教育体制も整っていますし、少人数教育なので演奏する機会も多い。今も音大をめざす女の子には「絶対に間違いないから同志社女子大学に行きなさい」と言っているんですよ。

——今後どのような活動を目指されますか。

高島 今のような、地域密着型の小さいコンサートをもっと増やしたいです。京都で「キョウキョウ」と言えば、どなたにも「京響」を思い浮かべていただけるように。そしてさまざまな方に、音楽を通して豊かなものを持ち帰っていただけるように。どこで演奏していても、そのように身近な音楽家でありたいと思っています。

(2014年7月9日)



山本哲士さん
染織家

既成概念からの解放

きものづくりの新しい形を提案する

制作者としての新しいあり方を模索し、独自技術の開発に挑戦する。柔軟な心で、きもの世界に新風を吹き込み続ける卒業生を訪ねました。

きものを縛る固定観念を取り払う

お仕事の内容を教えてください。
山本 素材づくりから染色加工まで、一貫したものをづくりを展開しています。私の父は帯の図案家でした。私も後を継ぐつもりで子ども時代を過ごしたので、今もデザインは私の大好きな工程です。

分業制とは別のやり方なのですか。
山本 分業制は、きもの需要が増える中で生産のインフラや流通の安定性が求められて生まれた仕組みです。でもそのやり方では、おそらく継続は困難だと思います。どんな業界でも当然、日進月歩で変化していくものですね。だから「きものはこういう手順でないと作れない」などという、ここ数十年くらいの間にビジネス上の事情で作られた縛りを、いったん取り払ってみようと思うんです。時代に合わせて新しい取り組みをしていこうと。

新しい時代への意識はどのように現実化してこられたのですか。
山本 大学を卒業する頃、父に図案家になりたいと相談すると「食べられないから」と反対されました。それなら食べられるようになるうと思いい、世の中をもつ

と知るために卒業後は問屋や染織加工会社で学ばせていただきました。ただ、今も技法的なチャレンジはたくさんしていますがそれが目的ではなく、あくまでも私が大切にしているのは、きものを通じて私なりの世界観を表現することです。きもの世界に通底する共通の世界観を土台に、比較的ダイープな領域に取り組んでいます。

ダイープさを少し教えてください。
山本 例えば「むかしつむぎ」という生地です。今の絹織物は繭の一部分だけを使って糸を作っています。でも昔の織物はもっと堅牢に見える。それは、雨露をしのぐ外側の層や塗り壁みたいな内側の層も含めて、繭まるごとを使っていたのではないかと。そういう発想から、繭のたんばく質がたくさん残ったままの糸で織りました。だからほどこいたり巻いたりするだけで生地が柔らかくなってくる。漂白もしていない生成りの生地なので、自然な風合いが良いとも言っていました。

珍しい技法なのですか。
山本 何事も価格とコストとの兼ね合いです。その結果、よそ様ではしていないというだけです(笑)。ただ、その枠を一步踏み出すと、もの凄く面白い世界が広がっている。「五十回染」という技法は地

色をまる一年かけて染めるものです。薄い色を何度も染め重ねて深い味わいを出す「地付き」という技法で、現代ではほとんど失われている領域です。「先水洗」という技法も面白いですよ。通常は染色の後、蒸しを施してから水洗いをします。この順序を逆にして先に水洗いをするとう定着していない染料がにじみ出て、思わぬ表現を生み出します。

均一なものだけがすべてではない

「ちょっとした要因で釉薬の効果が変化する、陶芸のようでもありませんね。」

山本 日本人の物差しには自然との共生や、不完全さの受容という基準があります。同じことは二度とない、均一のものだけがすべてではないという考えです。先水洗にしても、染色工程で事故とされることを試してみました。偶然をねらったら面白い結果が出た。お茶席やお寺で同う法話は私にとってはヒントに満ちて全部が宝箱のようです。ご縁をいただきたい清水寺では森清範貫主様の法話を聴く機会がありますが、秘仏のお話が強く印象に残ります。何年かに一度ご開帳する秘仏というあり方は、仏教でも日本だけのもののだそうです。日本の神道の神様は、

見てはいけないものです。大切なものは見せない。そこへ仏教が入ってきて神仏混淆が起り、大切な仏様は見せないという考え方が生まれたというお話です。きものも女性の最も美しい姿を包み込む。なるほど、日本人ならではの美意識だなと感じますし、それがきもの真髄だと思います。

伝統を大切にしながら個性を打ち出していくのが山本さんの志でしょうか。
山本 伝統という言葉には「守るもの」というニュアンスが付随しますね。でも

我々庶民の文化は非常に長い時間の中でさまざまな波に乗ったり呑まれたりしながら歩んできました。それなら新しい時代に新しい提案をするのが、若輩である我々の務め。それと同時に、私にとってきものは夢のかたまりなんです。一表現者として夢を持ち続けていきたいです。業界の未来をどう拓いていきたいと思います。

山本 きものづくりでは生活できないのとは違う、漠然とした社会認識を変えたい。例えば美大生さんなど、若い方たちの進路の選択肢の一つとして認知されるようにしたいです。私自身がそのモデルになれればという思いもあります。若い方にはもっとチャレンジしてほしいで

すね。もちろんきものづくりは、大学のキャリアセンターが積極的に勧める仕事ではないでしょう。でも周囲の百人は反対しても自分だけは夢を追いかけたいという強い気持ちで、わけも分からずエッジになる。夢を見るとはそういうことだと思っただけです。

同志社の学生の皆さんにメッセージをお願いします。

山本 夢を見ようと言いながら、夢は叶うものではないと思っています(笑)。夢は一生追い続けるもの。それなら小さい夢よりは叶わないくらい夢を追うほうが人生の道しるべになる。また時にはその歩みを「真行草」と照らし合わせてみる。書道の言葉で、それぞれ「書」を付けると真書、行書、草書になりますね。真書は楷書のことで。きつちり書く、少し崩す、思い切りかっこよく崩す。人間の成長も同じ。最初は真の形から学び、徐々に要領を覚え、自分なりのものを形成する。「真」があつてこそ「崩し」です。そして若い方たちには、「はた」を「らく」にするような「はたらき」方をしてほしいです。米粒ほどの存在だけど、世の中を少し明るくするような夢の追いかけ方を私もしていきたいと思っています。

(2014年7月3日)